
特 集 I

少子・超高齢・人口減少社会の人口移動—第7回人口移動調査の結果から— (その1)

特集によせて

林 玲 子

国立社会保障・人口問題研究所（以下、「社人研」）では2011年7月に第7回人口移動調査を行い、2012年度に結果の公表を行った。それらは概要、報告書、集計表として日本語版、英語版ともに社人研 Web や政府統計総合窓口 e-Stat に公開されている。今回の調査では、実施4か月前、まさに準備作業が大詰めを迎えていた最中に東日本大震災が起こったため、岩手県、宮城県、福島県では調査を中止し、北海道は9月に延期して行う、といった大幅な変更を余儀なくされた。集計対象は全国15,449世帯で、うち11,353世帯の全世帯員数29,320人の回答を得た。有効回収率は73.5%であった。

人口移動調査の歴史をふりかえると、1976年に「地域人口移動に関する調査」と銘打った調査を第1回とし、その10年後の1986年に第2回（当時の名称は「地域人口の移動歴と移動理由に関する人口学的調査」）が実施され、その後は「人口移動調査」として5年毎に定期的に行われるようになった。7回・35年間にわたる調査概要、調査項目の推移を見ると（表1）、「人口移動調査」と一貫して呼ばれるようになった第3回から全世帯員を対象とするようになり、調査項目は時代に合わせて少しずつ変化しつつも、第4回よりほぼ現在に近い形の調査項目設計となり、調査の厚みを増している。

人口移動に関する公的統計は、人口移動調査以外に国勢調査（大規模年）、住民基本台帳人口移動報告を挙げることができ、これらは悉皆調査で、市区町村といった地域別の詳細な分析が可能であるが、社人研の人口移動調査は、表1に示すような、ライフイベント時、複数の時点、移動の理由や生涯の移動経験、将来の移動可能性など、個人の居住地の移動メカニズムに関する様々な情報を得ることができる。これら調査を合わせるとわが国における人口移動に関する情報はかなり網羅されているといえよう。近年国連を中心とした国内人口移動の国際比較が進展しつつあり、各国関係者に充実した日本の人口移動データを共有することは十分に意義がある。

人口移動は進学・就職・結婚というライフイベントを迎える20歳代若年層で多いことから、近年の人口高齢化により全体的な人口移動は沈静化している。しかし例えば若い女性の就学率の上昇に伴う移動の活発化や、外国居住経験も含めた若者の移動経験の範囲の拡大、親との同居の減少に応じた近居の増加など、新たな人口移動の傾向も生じている。これらの結果はすでに「第7回人口移動調査報告書」（調査研究報告資料第31号）として刊

表1 第1回～7回人口移動調査の概要、調査項目一覧

調査回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
調査年	1976	1986	1991	1996	2001	2006	2011
調査対象	世帯主	世帯主/配偶者 /全世帯員	全世帯員	全世帯員	全世帯員	全世帯員	全世帯員
有効世帯数	7,691	7,825	11,387	14,083	12,594	12,262	11,353
有効世帯員数	7,691 (1)	25,672	34,781	40,400	35,292	32,205	29,320
居住地	出生時	○	○ (3)	○	○	○	○
	小学校卒業時	○	-	-	-	-	-
	中学校卒業時	○	○	-	○	○	○
	最終校卒業時	○	○	○	○	○	○
	初職時	○	○	○	○	○	○
	初婚前	-	○	-	○	○	○
	初婚後	○	○	○ (4)	○	○	○
	退職後	-	-	○	-	-	-
	5年前	-	-	○	○	○	○
	1年前	○	-	○	○	○	○
直前の引越前	-	○	○	○	○	○	
生涯居住県	△ (2)	-	-	○ (5)	○ (5)	○	○
現住地の居住期間	○	○	○	○	○	○	○
直近の移動の理由	○	○	○	○	○	○	○
将来の移動の可能性	○	-	-	○	○	○	○

注：(1)世帯主数。(2)三大都市圏の居住歴。(3)全世帯員に対しては出生時の居住地のみ、その他の項目は世帯主に対して。(4)初婚後ではなく現在の結婚後の居住地。(5)世帯主と配偶者のみ。

行および社人研 Web に掲載されているが、本特集では、本号（第69巻4号）と次号（第70巻1号）にわたって、さらなる詳細分析を試みる。

本号では、まず千年論文にて、世代間の居住距離（同別居、近遠居）の分析を行い、とりわけ、同居が減少するだけ近居が増え、また近居しやすいのは男きょうだいのいない娘である、といった、ここ10年の変化を見出している。続く小島論文では、移動する高齢者の属性分析を行い、移動しないと思われる高齢者においても、有配偶でない、持ち家に居住していない、県外居住の経験がある、といった要因が移動性向を高める方向に影響を与えていることを実証した。中川論文ではマルチレベル分析の手法を用いて、外国からの帰還移動者には、第三次産業の就業機会が拡大し、労働市場の流動性が高まっている地域に定住する傾向があることを示した。人口移動は、経済・社会の多くの要因により左右されることから、研究内容も多岐にわたる。

人口移動調査が開始された1970年代は、大都市圏への人口集中が人口移動研究の中心的な関心であった。2010年代の日本は、人口減少社会に突入したものの、人口増加が続く都市部もまだ多く、世帯数も増え続けており、社会の変化に対応する人口移動は、いまだ重要な役割を果たしているといえる。こうした中、移動と定住のベスト・バランスはどこにあるのか、動きたい人が動き、定住したい人が留まれる社会となっているのか、人口移動のメカニズムはまだまだ解明されるべき余地が大きく残されていると思われる。

Introduction

Reiko HAYASHI

In July 2011, National Institute of Population and Social Security Research (IPSS) had conducted the Seventh National Survey on Migration, one of the five surveys the IPSS carries out on regular basis. Due to the Great East Japan Earthquake hit in the midst of the preparation of this survey in March 2011, Iwate, Miyagi and Fukushima prefectures were excluded from the survey and the survey in Hokkaido was postponed to September 2011. Nonetheless, the total of 11,353 households with 29,320 household members, or 73.5% of eligible 15,449 households, answered the questionnaire. The basic results were already published on the web (www.ipss.go.jp) and e-Stat, the portal site of official statistics of Japan.

The First National Survey on Migration was conducted in 1976, followed by the Second in 1986, after which the survey became quinquennial in 1991, 1996, 2001, 2006 and 2011. Although there were significant changes in the survey design throughout the seven surveys stretching over 35 years, all household members were covered since the Third Survey in 1991, and the question items were stabilized approximately since the Fourth (1996).

In Japan, official statistics regarding internal migration can be found in the Census and the Report on Internal Migration, both published by the Ministry of Internal Affairs and Communications. These are the statistics which cover the whole population of Japan, allowing regional and municipal level analysis. The National Survey on Migration of IPSS, an official national sample survey, clarifies the detailed migration characteristics such as the place of residence at the time of important life events such as the birth, junior high school graduation, first employment or first marriage, and the time-points such as one year ago, five years ago and before the last move, as well as the life-time residence history, the reason of migration, possibility of future moving and so forth.

Mobility is normally high in earlier stage of life, due to the enrollment for the higher education, employment or marriage which would happen during one's 20's. In Japan in 2011, with highest rate of population ageing in the world, naturally, the slowdown of migration was observed on the overall basis. However, detailed analyses revealed particular changes of migration trend such as higher mobility of young women due to the higher educational achievement, wider range of migration experience of young people or high mobility among the elderly who are unhealthy or do not own a house. In the Special Issue of this volume (Vol.69 No.4) and the next (Vol.70 No.1), further in-depth analyses will be performed.

In the 1970's when the National Survey on Migration started, the main focus of internal migration was mainly on the rapid urbanization and concentration of the population in metropolitan areas of Japan. Now in the 2010's, even with the population decline, some urban areas are gaining population and the number of household is increasing, and the migration studies still play an important role. How we can fulfill our lives by moving or staying, where lies the best balance for the decision of migration, such are the questions which remain to be investigated along with the mechanism of mobility.